# 「男、突っ走る！」

第92回

第一稿

作・壽倉　雅

## 登場人物

木内　雅也（24）　『オフィスツリーイン』代表

国枝　佐代子（59）　『スリジェネ』総合プロデューサー
国枝　茉奈（27）　佐代子の娘
田所　俊子（63）　市民映画プロデューサー

野倉　浩太（22）　『スリジェネ』メンバー
藤田　昇平（22）　『スリジェネ』メンバー
山森　直海（19）　『スリジェネ』メンバー
富永　茜（23）　『スリジェネ』メンバー
坂本　寿梨（20）　『スリジェネ』メンバー

1　中央交流センター・全景

N「ゴールデンウィークが明けて間もなくのこと……」

2　同・ラウンジ

雅也と田所が座って待っている。

N「一度は頓挫した、地元在住の小説家・沖島友さんの作品を原作としたミュージカルの企画の話が動き出したのです」

と、佐代子と佐代子の娘・茉奈（27）がやってくる。

佐代子「おはようございます」

茉奈「おはようございます」

雅也「おはようございます」

田所「お久しぶり、茉奈ちゃん」

茉奈「ご無沙汰してます」

佐代子「（雅也に）うっちー、前に話した、娘の茉奈。この春に東京から戻ってきたのよ」

雅也「（茉奈に）初めまして、『スリジェネ』

の運営をしている、木内と言います」
茉奈「茉奈です。うっちーのことは、お母さんからいつも」
×　×　×
会議をしている雅也、佐代子、茉奈、田所。
佐代子「現状決まってるのは、本番が十月二十六日の土曜日で、会場はこの中央交流センターのホールってことだけで、具体的な話は、これから市役所と相談して決めていくことになると思う」
雅也「十月末から逆算すると、稽古スタートは七月ぐらいからですか？」
佐代子「ただね、今回は『スリジェネ』が観光協会からの委託された受託事業者として、事務局として制作をすることに代わりはないんだけど、一般からも出演者を募集することになるの」
田所「確かに、沖島友さんの『神様が願うまで』の小説は、私も読んだことあるけど、

登場人物多いからね。これを『スリジェネ』のメンバーだけでやるのは、無理だわ」

雅也「早いうちに、進めないといけないですね」

茉奈「公演時間、どれぐらいなの？」

佐代子「確定ではないけど、大体九十分ぐらいかな。それ以上長くなると、見てる方が疲れてくると思うし」

雅也「『七夕物語』でも、確か八十分でしたもんね。やってる側としては、とにかくどんどん進んでいくから、長いとか短いっていう実感はなかったんですけど」

茉奈「出演者側って、そういうもんよね」

雅也「茉奈さんも、舞台経験があるんですか？」

茉奈「私、高校の時演劇部だったのよ」

雅也「そうでしたか」

茉奈「まあそれもあって、お母さんと田所さんがプロデューサーを務めた市民映画にも、少しだけ出演したことがあるの」

佐代子「茉奈もある程度現場のこと分かるから、それならもうこの際今回の委託事業の運営を手伝ってもらおうと思ってね」

雅也「国枝さんのやりやすい運営陣でやったほうが良いと思いますよ。プロデューサーとして、観光協会とか出版社とかのやり取りだっていろいろ大変だと思いますから、スタッフ陣はある程度国枝さんの気心の知れて、お願いしやすい人選にしたほうが」

佐代子「だからこの顔ぶれにしたの。茉奈は娘ってこともあるけど演劇経験者だし、田所さんとはいつもいろんな企画一緒にやってきた言わばパートナーだし、うっちーだって『スリジェネ』の運営として一番メンバーや運営全体のこと知ってるから」

雅也「それは、恐縮です」

佐代子「出版社とのやり取りは、全部観光協会、というか正確に言えば観光協会の事務局となってる市役所の商工観光課ってところが担当するの。まあ私たちも、これから

企画が進んでいくと、商工観光課が窓口になるわ」

田所「脚本と演出は、今回誰がやるの？」

佐代子「まあ、ヤマさんしかいないよね」

雅也「確かに。この規模で、現場を回してホンが書ける人ってなると……」

佐代子「うっちーは、もうやらない？」

雅也「演劇祭で、散々懲りました。どんだけ金積まれても二度と演出はやらない、ってもう決めましたから」

佐代子「そんなに？」

雅也「もう勘弁してくださいってレベルですから」

田所「じゃあ、ヤマさんにお願いするしかないわね」

佐代子「あともう一つ、これは『スリジェネ』の特権って言って良いか分かんないんだけど、現メンバーや関係者は、事前に先行オーディションって形でキャスティングを決めたいと思ってるの」

田所「まあ、一般オーディションの中にメンバー紛れ込むのも変か」
雅也「確かに、それは言えてますね」
茉奈「メンバーから、主演決めちゃっても良いんじゃないの？」
佐代子「正直、『スリジェネ』として委託されたから、主役の女子高生の役はメンバーから決めれたらなって思ってる」
雅也「良いと思います」
田所「そうね」
佐代子「六月に入ったら、一般公募のオーディション告知をしましょう。それと同時進行で、メンバーオーディションも六月に開催。一般公募のオーディション開催は七月中に開催して、稽古は八月のお盆前ぐらいからスタートって形が良いと思う」
雅也「八月スタートで、本番まで間に合いますかね。僕が言えた立場じゃありませんけど、一般参加者には当然演劇やミュージカルが全くの未経験って人もいるでしょ。そ

うなると、基礎練習もやりながらの稽古で本当に二ヶ月でいけるかどうか……」

茉奈「八月だったら、学生は夏休みに入ってるから、最悪平日に何日か連続で稽古する日を作っても良いと思う。社会人とか成人の人は、仕事もあるだろうから夕方から来てもらうとか」

佐代子「そうね」

田所「全員が一斉に出番がないんだったら、シフト制みたいにしてさ、何時から何時まではAグループの稽古、何時から何時までがBグループの稽古みたいにすれば、何も全員が揃わなくても稽古できる日は作れるんじゃないかしら」

佐代子「そうするしかないわね。もちろん、本番が近くなったら通し稽古も始まるから、その点も含めて、一度ヤマさんと相談してみるわ」

雅也「今日の議事録、またまとめてグループに後でアップしときます」

佐代子「今回も、運営としてよろしくね」
雅也「もちろんです」
佐代子「じゃあ、今日はこの辺りで。お疲れさまでした」
一同「お疲れさまでした」

3　地下鉄・ホーム

電車を待っている昇平が、ベンチに座ってスマホで動画を見ている――バンドのドラムの演奏方法の動画である。
昇平「……」

4　大学・図書室

寿梨が、スマホで動画を見ている――バンドのキーボードの演奏方法の動画である。
寿梨「……」

5　電車の中

浩太が、スマホで動画を見ている――

バンドのベースの演奏方法の動画である。

浩太「……」

6　工場・中庭

弁当を食べながら、直海がスマホで動画を見ている――バンドのベースの演奏方法の動画である。

直海「……」

7　コンビニ・駐車場

菓子パンを食べながら、茜がスマホで動画を見ている――バンドのギターの演奏方法の動画である。

茜「……」

8　木内家・雅也の部屋（夕）

雅也がパソコンで仕事をしている――スマホに着信があり、気が付く。着信は浩太からである。

雅也「（画面を見て）コウタ……？　（と電話に出ると）もしもし」
浩太の声「お疲れ、うっちー。今、大丈夫？」
雅也「うん、大丈夫だよ」
浩太の声「うっちーってさ、来週の日曜日、空いてる？」
雅也「空いてるけど」
浩太の声「実はさ、市役所に行って、説明会に行ってほしいんだけどさ」
雅也「説明会？　何の？」
浩太の声「夏祭りのステージ企画」
雅也「ステージ企画？」
浩太の声「そう。実はさ、俺、今『スリジェネ』の有志メンバーと一緒にバンドの練習してるんだよ」
雅也「バンド？」
浩太の声「俺と茜とナオとジュリとショウの五人なんだけどね」
雅也「さりげなく、とみーを下の名前で呼ぶんじゃないよ」

浩太の声「しょうがないだろ、いつもそうや
って呼んでるんだから」
雅也「まあ、そっか。（と笑うと）それで、
市役所の説明会って何時から？」
浩太の声「六時スタートなんだよ。後で、詳
細はＬＩＮＥで送っとくけど」
雅也「そっか。日曜日だと、みんな稽古と重
なっちゃって誰も行けないんだ」
浩太の声「そういうこと。で、うっちーに行
ってもらえないと思ってさ」
雅也「良いよ。俺でできることがあれば、何
でも言って」
浩太の声「サンキュー、うっちー」
雅也「そのまま、説明会には直接行けば良い
んだよね？」
浩太の声「うん。もう申し込みのエントリー
は、茜がやってくれてるから」
雅也「了解。じゃあ、来週行ってくるから」
浩太の声「うん、お願いします」
雅也「はいはい、それじゃあね」

と、電話を切ると、スケジュール帳に
『バンドステージ説明会　１８時～
@市役所』と記入する。

9　市役所・大会議室（翌週・夜）
説明会参加者で混雑しており、中には
立ち見状態の人もいる――雅也が受付
にやってくる。
雅也「うわ……多……。（と何かに気づいて）
あれ……？」
と、ＬＩＮＥを打つ。
雅也の声「ねえ、コウタ。応募グループ名っ
て『スリジェネ』で登録した？」
と、少し待つが返信がない――雅也、
ＬＩＮＥをもう一度打って、
雅也の声「とみー。今日の説明会、応募グル
ープ名って『スリジェネ』にした？」
と、茜から返信が来る。
茜の声「ごめん。『アステリズム』で登録し
てる」

返信する雅也。
雅也の声「あぶなー。危うく受付で『スリジェネ』っていうところだった」
と、茜から返信が来る。
茜の声「ごめんね。説明会よろしく。あと、国枝さんにはまだバンドのこと話してないので、極秘でよろしくね」
返信する雅也。
雅也の声「それも危なかった。普通に国枝さんに話すところだった（笑）」
茜の声「よろしくです」
雅也、スマホをしまうと、受付の職員に向かって、
雅也「すいません。『アステリズム』なんですけれど」
職員「（封筒を渡して）ではこちらをお持ちください、そのまま中へどうぞ」
雅也「あの、団体が多い場合って抽選になるんでしょうか？」
職員「そうですね。この人数なので、必ずし

も希望する日程でというのは難しい可能性
があります」
雅也「分かりました、ありがとうございます」
雅也、一礼して入っていく――後ろ側
の空いている席に座ると、部屋全体の
様子の写真を撮り、茜にＬＩＮＥを送
る。
雅也の声「めっちゃ混んでる。時間が被ると
抽選になるらしい」
と、茜から返信が来る。
茜の声「え……。抽選通りますように」
雅也、少し遠くの席に、田所がいるこ
とに気が付く。
雅也「田所さん……」
雅也、封筒で顔を隠す。
×　×　×
参加者たちが、ホワイトボードに記入
されたタイムテーブルに団体名をそれ
ぞれ書いていく――雅也、手帳に書か
れた『８月３日１６時まで』というメ

モを見ながら、ホワイトボードの『８月３日』の『１４時』の欄に『アステリズム』と記載する。

×　　×　　×

祈るように手を合わせて、ホワイトボードを見つめている雅也――タイムスケジュールの発表をしている職員。

職員「続いて、八月三日、中央交流センターのホールの結果です」

雅也「……」

職員「時間が被っていないところは、その団体さんの決定になります」

雅也「……」

職員「十四時、『アステリズム』さん」

雅也「（小声で）よっしゃー……」

と、小さくガッツポーズをすると、茜にＬＩＮＥを送る。

雅也の声「他に希望時間で被る団体がいなかったので、すぐ決まりました。説明会終わったら、南公民館向かいます」

と、茜から返信が来る。

茜の声「やったー！　ありがとう、うっち――！」

と、田所が通り過ぎていく――雅也、下を向いて顔を隠す。

10　南公民館・駐車場（夜）

浩太、茜、昇平、直海、寿梨が待っている――雅也の運転した車が入ってくる。

雅也が封筒を大きく掲げながら走ってくる。

雅也「決まったよ！」

拍手をして迎える一同。

浩太「うっちー、マジでありがとう」

茜「本当だわ。うっちー、運持ってるね」

寿梨「ありがとう」

直海「うっちー、ありがとう」

昇平「ありがとう、さすがだわ」

雅也「いやいや、たまたまその時間に被って

る人がいなかったからだよ」
昇平「写真見せてもらったけど、あれだけたくさんの人いて、よく被らなかったな」
雅也「ひたすら祈ってたよ。被るなよ、そこに書くなよって。コウタから、土曜日の十六時より前って聞いてたから、演奏のタイミング的に十四時が良いかなっていう自己判断で書いたんだけどね。見事に、他の団体が書かなかったら、すんなり決まったよ」
浩太「ちょうど良い時間だわ、それ。やっぱり、うっちーは分かってるね」
雅也「必死だったよ。だってさ、みんなはもう練習始めちゃってるわけでしょ。これで、抽選外れたら、みんなに合わせる顔ないと思って、冷や冷やしてたんだから」
直海「そんなことないって。もしダメだったら、何かしらの形で発表すれば良いわけだし」
雅也「でも、決まったから本当に良かったよ。（と封筒を茜に渡して）あ、これ。今日の

説明会の資料」

茜「あのさ、うっちー」

雅也「ん？」

茜「それ、うっちーが持っててくれない？」

雅也「というと？」

茜「うっちー待ってる間に、みんなで相談したんだけど、私たち、今稽古があるでしょ。今後、また説明会とかそういうのがあった時に行けなくなったら困るから、この際うっちーに私たち『アステリズム』のマネージャーをやってもらえないかなと思って」

雅也「マネージャー？　この俺が？」

浩太「うっちーなら適任だと思うんだよ」

雅也「そうかなぁ」

寿梨「でも、これから通し稽古も始まると、私たちが抜けるわけにもいかないしさ」

雅也「まあ……それもそうか」

直海「どう、うっちー？」

昇平「頼むよ」

雅也「本当に、俺なんかで良いの？」

浩太「うっちーだから、頼んでるんだよ」
雅也「（微笑んで）分かった。俺でできることがあれば、何でもするってコウタに電話で言ったもんね」
浩太「うっちー……！（とハグをする）」
雅也「コウタ。ハグする相手が違うだろ」
　じっと浩太を見ている茜。
浩太「あ、そうでした」
雅也「（一同に）知ってる？　この間コウタ、説明会に行ってほしいって電話した時、さりげなくとみーのこと、下の名前で呼んだんだから」
寿梨「ああ、ああ」
直海「やってるね」
昇平「確信犯ですね」
浩太「しょうがないだろ。普段からそうやって言ってるんだから」
茜「（圧をかけて）コウタ」
浩太「はい」
雅也「尻に敷いてるね。『スリジェネ』の運

営に誘ったとき、メンバー同士で恋愛したら稽古がやりにくくなるなんて大口叩いたのは、どこのどいつよ」

浩太「俺です」

茜「ああ、言ってたわ」

寿梨「そんなこと言ったの？」

雅也「今じゃ考えられないでしょ。二人が付き合ってるって話聞いたとき、どの口が言ってるんだって一番に思ったもん」

浩太「すいません」

雅也「まあ、二人の良いコンビネーションがあるから、この『アステリズム』だって上手くいくんじゃないかな」

茜「うっちー」

雅也「マネージャー、精いっぱい頑張らせていただきます」

一同「お願いしますッ」

笑い合う一同。

つづく